繪本豐臣勲功記

十編

壹

へ遠13
2209
61

特
門へ遠13
帙2209
巻61

櫻澤堂山編輯
翠榮堂半山畫

繪本豐臣勲功記七篇

浪華書房

文海堂
群玉堂 梓

羽柴四位少將筑前守秀吉

柴田修理進勝家

中川瀬兵衛尉清秀

佐久間玄番允盛政

後藤又兵衛基次

澁川左近將監一益

毛受勝助家照

加藤虎之助清正

繪本豊臣勲功記七編巻之壹　目録

大徳寺焼香秀吉大示威　附　祥禮次第

羽柴の大軍四方と圍む図

大徳寺葬禮行列の図

同　焼香の図

渋川跋爭虎謀集令法將　附　法將論議

同図 論議

一益謀使秀吉勝家和睦 属 雪中達使

秀吉寶寺居城の図

前田侍雪中使節の図

前田利家共臣設長久謀 属 恭得長濱

柴田勝豊轟信の図

繪本豊臣勲功記七編巻之壹

江戸 櫻澤堂山 編輯

大德寺燒香秀吉大示威 属 拜礼次第

南華去人得る言あり身は汝が有ふあるべき天地の妻
秋あり生は汝ろ乃ふあるべき天地の妻和あり性は汝が有
ふあるべき天地の妻吹あり孫は汝が有ふあるべき天
地ふ妻吹あんぬと宜あるうかの妻ふ吊礼しさそまつる後見院
殿様大相国一品秦嚴大居士と称へまいらるる検ふ左世さりし
時は天魔鬼神も崇るふ方あるべき地も完ろう物として日月
月とも懐ふさべふ大猷暴戻あるべしろども一次種族の怪を発し
ろう亡ふ衆次ふ萌し来て終ふ六月二日の夕本能寺裏の紅霧

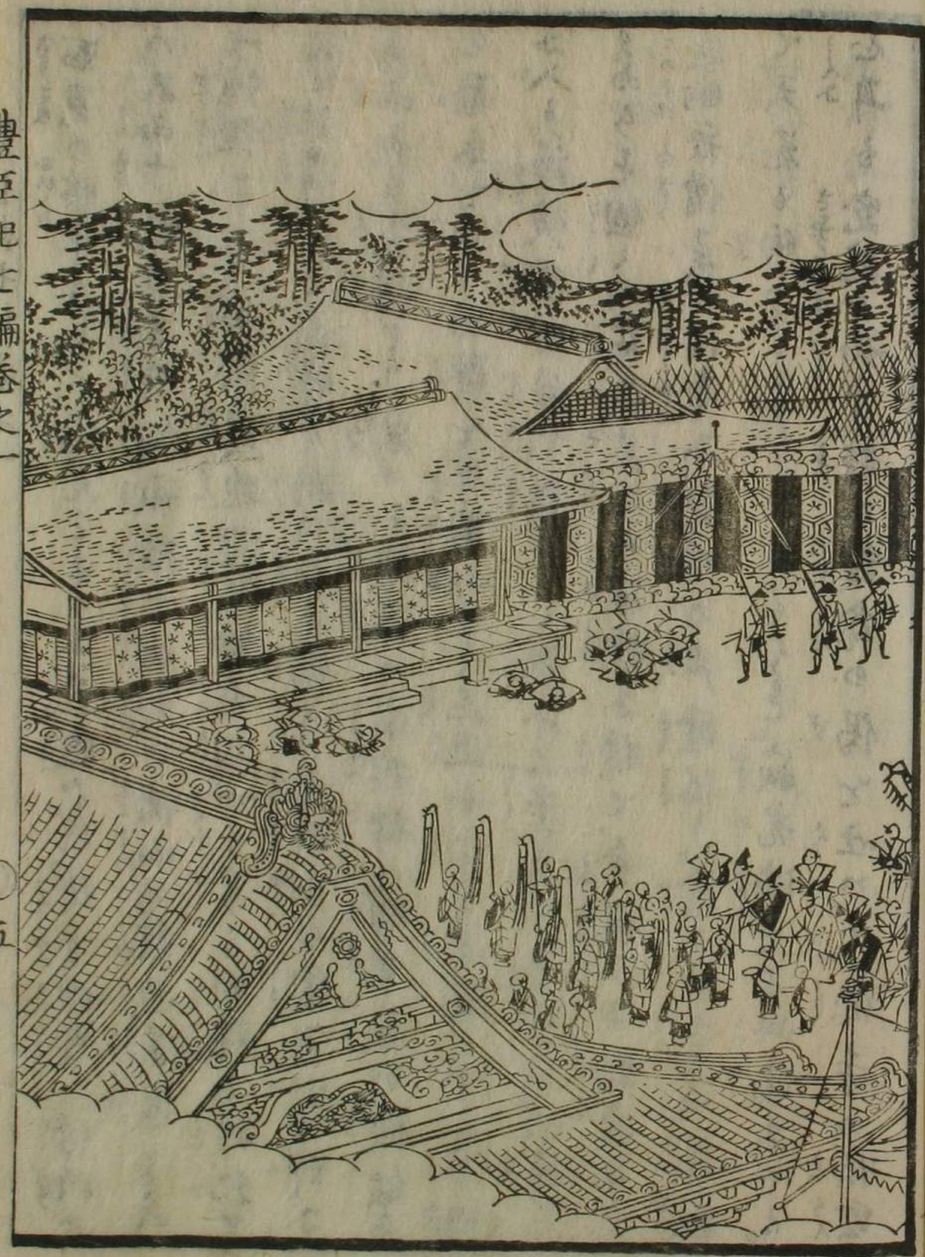
に滅して天地の委敗此に亡び兵和兵吸も名離る然に要悦
に絶くして其礎を蹴こと能はず衛く滅ぶる緒の況然る
に天正十年冬十月十八日のゆふべありける然るに羽
柴筑前守四位侍従兵部卿秀吉は遠遠山城國愛宕郡紫野大
徳寺におひて故太閤の追薬式を執行ふに縁て計議を設
くるべき旨のうちに指揮あるて弁長谷堂山西に乗山嶺
戦小倉東に麻谷白川岩倉日長くして砦砌山科後面に大原
小野庄郷城を南に唐橋四塚竹田原叫今熊田に長田藤須賀
大谷祇園田仙石淺野を大将として駿の名士を領行時号
にふるく大徳寺を寛国せよとのうしに舎利四方えた
を分撓ふ次に小川土佐守羽根田長門守久波
山修理介木下將監倍を以て禁裏に奏して主上を守護し
たてまつらせ。備前赤松原七郎左衛門尉。素庵治右衛門尉。荒木平右衛
門宋大蔵。塙田仁右衛門倍に法令奉行に達させて。寺内の傍
徒法方の吊使案内の麦を堂役させ。生駒新八郎。小西弥九郎。
両人に八一万騎人の強兵を。揮に撰て督合せ。大徳寺の四面
を圍ませ。標面に非常の勅諚を禁制にふさせ。密内に時号を洛
外の。埋伏にふさせ。自分の陣へ。知らぬ人をもふと多く集て。區
くに身を固めれば。上被は羽柴の微識印を。膝摺たるう
の法被と被れど。下に濃鞘鞍肱甲脚角孫仙利くし侍
荒名。別て舎弟長濃守秀長に一万騎人を左右翼として。總
奉行職を堂領。万方に指揮を傳えしめ。其外精舎の土塀外

大德寺葬式の前日秀吉指揮して洛外の諸地へ埋伏の兵士を分伍

ふ。三町四方ゞ其際へ麻垣怒垣結繞し。四門ふハ金定紋馬印ゟ。
惟幕を張て虚実を深ふし。遠観の兵ハいふもさらあり。公廨衙
廨ふ警固の武士ハ長槍の陰を立連ね。篝流ふハ火素を焚く其
いと猶たゞ発放さんぢ。仙て際くの嚴密なることゝ麻を積る係く
あり。備しも御法事の刻限ハ。当十五日巳の上刻。これふ依て法
國より。他集りし大小名。遠日と曠と待遇と雅ひ。大徳精舎へ
群参せ。然るふ御葬式の結梅を頂ふ説若あべ。まゞ流斎の葬
樹ともて。右大臣の御係を造り。これと槌擲ふ安置し生ゐらせ。
錦綾ともて惟とふし。金銀珊瑚。瑠璃。水精等の
珠寶と穿ちて幡幡を懸。瓔珞を垂荘嚴験く言も尽せぢ。
御棺の前壇ハ。池田ふ新舞改これと搗。後壇ハ信長公の御

雪児秀吉の猶ゟる。御次九秀勝これ仮搗。秀勝己ふ柴田勝家ゞ
勇吉頼て外戚ゝ是後寄結者のみを備て近来。羽柴家へ
太刀ゟの御右刀を持して。御輿ふ傍て完歩しまふ。これふつゞ
のて。北畠中将伝雄。神戸侍従信孝。御甥所の御名代蒲
生右兵衛大夫賢秀。柴田勝家。勝川一益。丹羽長秀。池田勝
入斎。前田利家。細川忠孝。佐々成政。中川清秀。筒井順慶。
山陰川侍。金森長近を殿として。其外織田家恩顧の法士。素袍の
袖を連ゐるあるべ。稜の稜を交ゐるも左て。威儀整然と御供
あ也。外素門の諸侯代参の使者。毛利上杉を魁として。次
第ゞふ。連歩まるゝ。喪服の武士ゟ
孫人。二行ふ並びて供奉しまゐる。其

紫野大徳寺ふ於く
秀吉亡君の葬禮を
修もろ



而見の悔しきこと。慨んとまるゝ言迄ぞ。倩亦理葬の儀行ふ
ハ。又山十剎の名僧知識。洛中洛外の法山の衆徒。来集せられ
て風俗まれゝ。都鄙遠近の貴賤老幼。女も男も同群ふ。拜礼せ
んと雲集ること。荒曆も朝の霞の像く。雨行夕の雲ふ似て。野ふ
も山ふも充満せり。然るふ御像の虚棺椁ハ。羽葉殿の假鼓ふ
る。聚乐を出て西陣を。舟岡山まで正直ふ上り。連遷として寺内
ふ入り。陸鼓節く法列整しく。院ふ上堂ふ早まゝ。供奉し
まからを個くい。前後左右の座摠ふ接て。金區くふ勒座さり。
遠胸無僧天口同青ふ。梵唄の声澄徐り。錬ふや光雲鬘鬟
て。天花も雨ふるだりふ。ふるもたるも。寂光淨土も此場ふやと。
心耳も充洗ぐ如し。時ふ鎖龕の偈を吐い。大徳寺の怡雲

和尚拠表ハ玉仲和尚これを勒む。紀翁ハ古溪和尚。会通ハ喜座
和尚。奠湯ハ明外和尚。奠茶ハ仏笑和尚。捨骨ハ竹箭和尚ふり。
こまらの唱偈次第ふ早まゝ。末期の導師峡雲和尚法炬と乗て
後炬を投じ。乗炬の偈を唱へて曰

曰十九年爰一場　　威名況什麼存亡
清寒史程優曇沙　　吹作梅花遍界香

時ふ伴僧の偈二人茶ふ濃せしゝ卓の上ふ。吉地の香煙ふ香笆
添てこれを正面ふ推置ハ。前田徳善院玄以法印。燒香の次第と
淺茶人と。書記玉ゝ一茶を雙ふ擎げて左ふ進めハ。右の
左ゝりハ松系七郎左衛門。同じく進て對座ふ。言ゝふ京
ゝらは。方便燒香の順次とりて淺連にまゝふ名次第の列と茶

さべ。至しく樒香あるべしと。云とゝゝふ去以法下。一巻の繪
して。清拳んとゝふをゝゝろふ。たの外陣ふ勒へゝる宗田彼宗大
吉物。元若の帰合戦ふ亀切ゝ。神戸伝後伝者ゝこそ
今日一番の焼香ゝらめ。快く進ゝゝ。彼家跟守まゝら
をべしと。伝者ゝの後と推ゝ。ふしてゝ。もでふ進ゝんぞる掇
ゝ。ふ畠の長浜星崎長門守。岩らゝと考と振ゝ。伝
者ゝふ姑く所孫行ゝゝまゝ。遠方のゝ若伝雄ゝゝ
そ。故右大臣の二男ふおゝせべ。焼香一番ゝるべゝれ。牡丹ゝ
さゝふ切ふゝ。進ゝゝ。進ゝゝ。と星崎も後ふ副て二番
三ふ出ると。淀川ゝを羽置ゝゝゝ。ゝゝ等あゝと。制し止め
て綱と誓し。伝雄ゝ伝者ゝは三男ゝれべ兄弟の

差別ハ在せど。今既日本を二ふ領ち東西各二十三箇國宛領
しゝゝべ。就何と先とし。就何を後と定むべき。是ハ両郷共ふ
進ゝて所焼香あるこそ。然るべゝ。我慢面ふ慢ゝゝ。ふそ。
柴田星崎後ふゝと思ひ。一盃ゝ羽ふ酒ふて。伝雄伝者と共ふ進
ゝ。惣見院殿の霊前ふ参り。恭しく。再拝ふし。既ふ焼香の
卓前ふ座し。香筒の蓋と拄んとする。鳴方の方の帷幕の内
より。伝雄。伝者。焼香姑く待まゝと。寺中の樹竹も振動せ
る。大寺声ふ呼ゝ。遠猛勢ふ響と怯ゝて。両ゝ達いふる
さらゝ。柴田。淀川。一斉ふ一足退て進ふやゝると。祝行遠方の
幕捲。裾出ゝる一官人ゝ。其装束を拝ふ観べ。烏帽冠
ふ。黒き闕腋の袍の絶服着し。玉の平緒黄金の魚袋螺鈿の太

秀吉天服を
借る北白神
戸柴田滝川
傍の暴権
と扼ぐ

刀を綾ふ帶び。三法師君を抱きまゐらせ。鼓音靜ふ巍〻然と記出ふ。是列羽柴筑前守四位少將秀吉なり。此左右に八加藤虎之助。同孫六。福島市松。元桐助治。石川兵助。藤谷助太郎。平野權平。服部忠内。石田佐吉侍。万丈不當の猛勇士。十有六人主君を守護ふし。眦眥の上ふ小顆靴固め。肩衣袴着袴の裾を高く塞て。八方ふ眼を紙る中ふも。福島正則ハ。敵の讐憤瞋去れば。齒を切鳴し拳を握り。大將命令做るべ。唯一揆ふして。吐息を逼て立る相貌。方僅ふも車の軌るあるべ。扼ぐんぜ威烈あり。連座法國の大ふ名も大ふ響き。更ふ羽を出を雀あく。元津を呑で勤へり。秀吉眼を瞋て貯用を。地も裂だるの

声を発して。信雄信孝の不孝人。紫田藤川の不忠不義。何の就あるとも。亡君尊靈の碑前へ。朝夕ハ一つるぞや。尾張國の主樞の所作あり。天下の御家督ハ三法師君の御燒番。揮ざるうちハ。神靈前へ迫づく縛決して愧れ。退止らをよと。咏張大音威あつて。猛き相貌ふ。無人强と徹てだり。後日の權位百倍して。仰視る輩もあるべし。隣家これふ怒伐たつし。新ハ無礼あり羽柴秀吉。三法師丸ふ御家督の名あるを。却てふきゲ如く。霜露ふ等き幼雅の君あり。太平無事の世と違ふ。方僅ふも合戦絶まるべ。新弱年の三法師丸。信軍ふ招揮の做べきか。結ばこそ。両郷織田の後援と立て御家督の縛洗ふ決擬て。万事の威紋丁辭せるれば。信雄信孝二個の

卿ゞ。魁不燒番まるこそ吸あるを。然を秀吉驕くしくも。威儀華りて其警蹕。推ゞ許しる相行ぞや。公達方さへ礼後ゑまべ。烏帽子狩衣冠をるゐ。番ハこれゞ臣家として。冠彼しハ無礼ゑ万。主家ともつて蔑ゐ過紀らぞ。我を振ふく両卿の御燒番を止しハ。其罪筆て揚るゐもの有ー燒番年らば必決罪を蟄まべし。先く渠ゐ御拙名有ゑと謂せ。果ぞ。秀吉輙くとうち笑ひ。二法師君御家督ゐ備り三位中納言の任官をもて。禁庭より賜りしハ。天下の績績ゐまべ有り。這秀吉ゐも其撰舎くく。大膳と成て内裏を守護し。國家を安穏まべを勅命。これゐ因て四位少將ゐ任ぜらゑた り。然とゝども不存ありて。今日までも沙汰せざるハ。各ゞ不義不忠ある行狀を。汗紙んゝめ有りしゐ。我遠慮せしー的月ゐ違まべ。果して三法師君を拒絶。侯雄。侯孝ゐ一番の燒番せさせ。法將の前りて。御供ゐ。織田家の績績と見せんゝめの謀行その邪佐を抵ぐんぞ。御幼君の苗代ゐ。二位中納言の襲來彼しハ。後來の秀吉有ゝぞ。今日ハ是主君回然。我を隨氣といハ。言張ゐ斷る言狀踏ゐ勝家ハ越中ゐおいて。上杉景勝と合戦有ー。上方の大変と軍もの有ゝば。即純登るゝを後有ると。上杉と和睦もあさぞ。後軍ゐも掩ぞ無態ゐ逃出。若發ぞハ来りしゝど。明智ゞ大軍の猛威ゐ怖を。後陣の来らぬ西を。其地より暮び退返しー。吊軍ゐ値偶ざるのゝ。亡君の御念當君の御身。織田家の存亡ゐハ望も遺ぞ。自己ゞ

領する國中のゝ城。大持ゐ給ふ。行狀ハ。自立の心あるが
如くあり。是不忠とハ謂ざるゝ。まゝ〻徳川一益ハ其途遠しと
いふとゝ。人ども。主家ゐ大変あると聞たゞ。更ゐ怒ふる氣色なく。
君臣たてまつるまども。忍憤の心もなく。却て猶楽あんど
の趣興。これ何といふ戯事ぞ。自己が勇氣を見せんとやゐ。緩
くと上意なり。我意を専に君恩を忘れ。伝孝の道。滝川一益の婿伝孝
を好索として。東國の官領なりと。孝不孝の差別も
なく。御家督を妨げんと邪計を懐ら。不孝不忠の神戸
柴田と謀合せし。今日の取行。此等の悪行邪智ゐおいて
若代未聞と謂つべし。御連枝なりとも信雄ゐハ。岐阜城ゐ
在て。二万ゐ餘る勢ありあゝ。況る大変の告を聞。蚤那山

城へ馳参て。父の仇を敵んとハせず。明智ゐ怖れ。清洲ゐ逃
投。安土をも光秀が当ゐ棄捨らるゝ。樓屋隱ゐ大膳病。所面目
ゐ亡君の。御位牌前へ朝ふて拜礼いさるべき。警を被ぎる心
ハなくて。偖の天下を奪ん。と萌念の無道の罪業を取ふ
東西なるべし。それゐ劣らぬ信孝ゐ。大坂の陣処ゐ在て。
二万ゐ及ぶ軍士を領し。四國征代の將として。既ゐ出船ゐ
臨ん。明智の変を聆ゐ。迅き系切ゐ推進て。父兄の仇を撃
んとせず。丹羽長秀が帰を待ん。逃准位セ。部隊ゐ練。近
秀吉ゐ洛を等て。總大將を特授ゐ。我功を奪ん。と。
彼山崎の敗ゐ臨ん。無態ゐ進行て。奔爰父ゐ功碎ん。
既ゐ危く見へる変を。法將ゐ一命助らを。証とも知らで逃さ

ろい。織田家を滅し滅亡せ。それぐ〳〵我力もて。山崎の一戦始ハ明智を亡し多〳〵武威を。三法師君を失ひまいらせ。二男あづゝも織田の家督と。横領せんとの政企ハ。瀧川柴田と吾傑せ。権威を恣ゆして。焼香の礼を失ふ不孝者。さぞ亡君の尊霊ハ。御憤ハ十一生さん。伯父聞と云あゞ天下を奪ハんことを望むハ。取も整さん。猛毒人あり。弓霊あくと雖を受させ玉ふべき。高人ハ荷擔もつ瀧川の大脇勇。柴田の隠病者。亡君の讐を撃べき言ハ。あふて。忠臣義将を亡せんとする。無切不忠の身ともつて。古臘と言頑。故逆邪恣ハして。上下の礼儀を弁へず。清洲ハ古りて集舎せ一機舎。心怪ハ少將ハ乃郎ハ。腰を擾せ一法外至極。秀吉ハ身ハ彩奈

ふせよ。官位ハ朝廷の政刻ハ。私事ハ礼義を養ハ。天子ハ射して不経の所為ハ。羽柴秀吉新ハ。遠分出頭ハ。是亡君の所猶量ハ。そなたと蔑ハ。君への不忠。都て那般ハ邪仍と随ハ。悪事と欲ふも輩ハ。勅命と台命とハ替りまゐらせ。逆賊朱と被まくる。其罪とハ礼を。あり。解失あらバ返答せよと。怒然る声ハ憤怒を発し。蠢と時く眼中ハ。金色怒る光を放ち。発他と眺て立ハ。れば。信孝ハ。ふもさらあり。柴田。瀧川を叡として。大膳ハ敬の他久間。蓄ハ。まで。一吾半白の讐ハ。今日羽柴と抜ぐべき。内禅も却て秀吉ハ。逆礼さ。忠義の何ハ理と至されて。左右の返何も出べ。逆人ハ進退此ハ極。

弓霊茶へも進まざ。退も亦要緊不亟て。共不赤面冠口逃。
婦懦くそろ中不も。膳家満面朱の如く。瞋の筋と額不露え
し。牙を噛ども為方なく。吐嘘吹潜して立る時。[illegible]
落び声ら〻不。柴田殿不老態と厭もず。遠路と遥く上京
せ[illegible]。さぞや徐ま[illegible]らん。頑備命属おいる。又急導血の
役人雀。快く出て膳家の。力髄と脅力の迫ふざけ。接柔らげ
て進ぜよやと。命と遅し福鳴服坂元胴石川加賀。猶谷の
力士達一度不繁亂くと立蔑り。異口同揚不。雷の像き声と
発し。先日清洲の奉會不。柴田殿不も昔を忘れず。俺们ぶ主
君秀吉不。導引の緒を稚く不。御特ありと傳聆。俺们まで
も統ぶらさしれ。今日ハ其御返種。主人不替りて進出さり。

定めて疲れ[illegible]ふ[illegible]んぶ。肩腰腕いふ不迫ず。身狂原より
肺端まで。接柔げて進ぜべし。別て佐久間玄蕃殿不ハ當舎
東西御擬撥。陪言荷擔まる御返報。柴田と偕不接起べ
し。滝川殿不も柴田と一意。連結社と存ぜれば。同命相伴
せ〻ぜよ〻し。先く純吉つまらん。如何くと脚踏り。
瞬る眼不瞬るせず。柴田。滝川。佐久間侍ぶ肩頭搏むぶり
不迫づさ。脱塞して逼進る。金是羽柴ぶ忠臣義士万吏
不留強勇あり。其ぶ中不も福島市松正則ハ歌舞の憤怒
甚ぶられ。方僅こそ柴田勝家ぶ。生首拠砍られんぜと。古
木不掴く。鬼蘿の羅りし。係き。脱斧舗し。柴田ぶ首筋掻
搏き。撃倒さんぜ[illegible]ると。清正速く制止め。短慮ハ切伐

損ふあり。扨てや主君の御指揮の出ざるものと。時よやと密ふ
看めて勤へさせり。福鴻のゝ久兵一同怒ふ憤ざる顔色眼
光。有無の返辞の次第ふ周て。是や今ふも繁製猛勢。子孫の
柴田勝川。佐久間。面色變じて土の像し。扨てや勇ふき信
雄信孝。不孝の罪と責ふ者ら也。怖入る相貌い聾の像く
唖の如く。言句ハなくて惘然り。時分い方僅ぞと生駒新八
郎。ふ西弥九郎。堂若堂後ふありるゞ。時号の燈火を爆と
沖まバ。寺中の四面ふ張繞る。白幕一安ふ斷落せバ。内ふい
勇士猛卒倍。其員幾庶を知ず。各ゝふふふ兵器を提へ或
ハ弓列伍鳥銃列伍。矢頭筒形等一連行。其と令バ発さん
と。瞬もせで嚴密ふ。仮部整して勤へり。これを視より他

國の猛士。意一大事の起りりと。安き心の業ありし。備ふ
門外ふ結張る。羽柴義濃守秀長。内の時号と一斉ふ。屋
銃口鳴と鳴りせつ。前後の門より丑千條猪。左右の周囲よ
り丑子條猪。寺中へ吐と亂投。方僅義濃守ゞ時号を祝り。
法外四方の嶽ゝ谷ゝ林野ふ須て伏兵る。是田。條須賀。仙
石。淺野。大谷。外子田ゞ猛軍勢。都合三万有餘人。一孫の勢丑千條猪
旗遠幟を推記ゝ。喊とつゝり金鼓を鳴し。山嶽も振動も
るゞりふ。四角八面より推紀来り。大德寺を緩圍ふせし。
怪弟まで時器し。これゞさめふ鬼と呼ぶし。勝家も。自大
我慢の勝川。佐久間る。唯惘然と軍果法抖て脅退ふも。秀吉
猛も声を烈まし。柴田勝川神戸の族。ゞ見も眾互を紀も

べふ張ふハあるまじ。今日ハ最大切なる亡君の御追善の御場ふ
きべ。暫く寛免いたすべし。それ徳善院焼香の。次第を快く済
連れよ。法士其所を案さぞして。撚香をべーと渇平り。三法
師丸を抱きあげふ。徐くと進み出らる。卓前小蠟く無と
座し。正斜ふ焼香せゝるゝ。這時茶田玄以法印。うやく
しく巻の繊き声読らふ。撚香順次と済挙るべ。各筵ぐ
孤所其紀ふ田

總見院殿従大相國一品崇嚴大居士御追福焼香之順列

織田三位中将三法師秀信卿

羽柴四位少将平秀吉

北畠中将平信雄卿

神戸侍従平信孝卿

羽柴治次丸平勝

御甚所御名代

蒲生右兵衛太夫源賢秀

織田源五郎尉平長益

柴田修理進匹位勝家

滝川左近将監源一益

丹羽五郎左衛門尉長秀

羽柴美濃守平秀長

羽柴孫七郎平秀次

山崎合戦以軍功進席個く者

同　中川瀬平　清秀
同　高山右近　長房
同　池田勝入斎　信輝
同　筒井大和入道　順慶
同　塩川伯耆守　国満
同　細川刑部大輔　藤孝
　　荒田又左衛門　茂原利宗
　　堀久右衛門　秀政
　　森勝蔵　長一
　　佐久間玄蕃允　盛政
　　蜂屋兵庫頭　頼隆

金森又郎八　長親
安部仁左衛門　友行
不破彦三　元綱
毛利輝元の苗代　福原越後守
小早川隆景の苗代　中川主馬
吉川元春の苗代　谷川市左衛門
上杉景勝の苗代　直江山城守
浮田秀家の苗代　花房志摩守
蜂須賀彦右衛門　正勝
浅野弥兵衛　長政
黒田官兵衛　孝高

山陰合戦後三数回連列焼香之席一陪臣者

堀尾茂助　加藤虎之助
氏桐助佐　福島市松
平野權平　加藤左馬之助
脇坂甚内　糟谷助右衛門
石川兵助
池田勝入斎之臣
氏桐宇左衛門之臣　伊木清兵衛
中川清秀之臣　同苗小七右衛門
筒井順慶之臣　鳴左近
寺山右近之臣　井利八郎左衛門

堀秀政之臣　奥山三左衛門
丹羽長秀之臣　九毛森四郎

其外遠近の国々より。群参する将士殘らず。名くゝ是を
と後連ぬれば。其順列を案ずるに。焼香の座に進むもの。
その員大低二百餘人礼儀の緒院に早見べ。秀吉衣服を
整頓玉ひ。使方の使者に饗せらるゝ。大に渠侍を号ひ給ひ。
まづハ故君の御葬礼。滞りなく相勤る緒。大慶これに
過ぎ。遂てこれより報謝と。稟入べふ存ぜれば。各主家へ伺ふ
あるべし。別て上杉の使者。直江山城守に初て対面。秀吉
ぶ悦これ不可べく。後く休息ありて次路ふぐ。上方と
一覧せらるゝて。帰國あるべし。主家の返答辞宜の程。特入ろ

と命せらるゝ。余こ羽柴ゞ威ゝ振して。切腹ゝ辭別を綸り
ける。中ゝも直江景綱ハ。藝中の始末を見聞し。後ゝ秀吉
ハ古今無雙の名將なりとて賞感する綽屢あり。しゞ
帰國して景勝と進め。羽柴の幕下ゝ屬せしこそ。得
ゝ上杉の謀士なりけゝ。斯て秀吉卿。這境内ゝ一宇を營
立し。亡君の御位牌ゝとして總見院と号し。壓落の料と
しゝ。白銀千枚これ献綸り。粧永代寺領として紫野の
地ゝおいて。五十斛を寄附しゝ。ふ。落る追福の施營。ゞ寧ゝ
執行ひ。ゝひしゝ。ハ。誠ゝ莫太の忠切ゝふと。貴殘追俗
ゝ。しゝあべて。感涙をとそ流さる。然バ羽柴殿の威勢。日く
歌く增長して。さゝあゞゝ朝曦の昇るゞ傍く。池田丹羽と

織として。織田家の舊臣古蜩まで。金秀吉の下風ゝ祖き。威
氣全く天下を動ゝしゝけゝ。柴田佐久間侍ハ。弥增羽柴を
惜ゝ。斥時も速ふ滅さでハ慨たゞと。其計儀ゝのゝ云と苦
め。日を送る綽ハ寧ゝ。織田家の滅萌ありと云ある輩ハ
潛ゝ肩を顰めゝり

瀧川政章虎謀集會法將屬法將論議

父子の位ハ先後より定り。君臣の儀ハ上下より正し。位ハ礼ニ儀ハ義ニ
其父子ゝして先後あく。君臣ゝして上下あるものハ必ず
滅を招くこと速なり。這勝家の子あり。一益の同僚あり。
信孝の君臣ある者ハ。柴田修理進勝家あり。其分の大成
ことハ。今七刻の播磨として。織田家の臣長ゝれば。從

又是ハ右もべき。然ども其業遂ハ背くべ。秦山ハ座もとも安るべくば。悲しいかな此人。茲ハ澱川一益ハ。勝家秀吉織田家統虎の英勇として。迚来倍く不和なるを幸とし。是と平和ハ彌ん相と着せ。自己が邪佞を壓逼し。柴田羽柴和睦の奇策と云徇し。法将を旅亭へ集んとする。その礎念いいうんとなるべ。今勝家秀吉として。両虎を遠ハ闘もして。一虎を損し一虎を傷け。其虚弱ハ就て。いづをとなるも撃とれい。事容易して成就すべし。と怖畏も恐慮と発し。先勝家を憤動させんと。渠が旅亭へ潛ハ赴き。報到を投て對面せんとも。遠晌柴田勝家ハ。清洲已来秀吉と始く不平なる所ハ。遠遭燒香の席ハおいて。法将列座の中なるを是可見が如ハ自己が。不忠無道を記さを。面目ハ失ひなるべ。其鬱憤骨髄ハ微し。強望羽柴と新戮して。心の怨怒と敬ぎべし。寢食を忘れて胸を苦しめ。鬱々として立なる所へ澱川入来あせしなば。殺ぶこと張り。席へ進めて時機と文話し。然して澱川柴田ハ響ひ。昨日羽柴秀吉が挙止朝廷の位を冠ハ被て。無礼ハ云語ハ絶し。乃命令憤怒ハ懲ぎ。足下ハいで所念やと。問昇られハ俗理進勃然る顔色悪鬼の像く牙齒鳴して。精霊時云発ことも。あらざりしが。燈るだるりの大息吹出し。澱川殿の面前。殊ハ恥投昨日の所見秀吉禁裏ハ威と振て。恐の言残吐とも。君ハハおろ畏るべき。渠ハ面ハ忠

義ハ見るもとど。内意ハ明智ハ明智る君人。浩る新紙ハ阿容くくと。指揮を受るの法あらんや。君前も元瞬の職ハ在り。蹤更織田家ハ内徳あり（信長の妹小谷の方なり 別とまるべ ハ形ふるあり 昭日曉番の番ハ）

志て屈伏の態を見せるハ。渠ぶ心を意らしめ。闘物あきせん。彼斗あり。虚と窺ふて員数を偽ふ。ハ意ハ明柴ぶ居所を囲囲瞬する際ハ臨刑して。日来の邪威を拓ぎ。罪と礼して驕吹せんハ。其時こそハ足下ハ。頑ての約を変じ。西ぶ。荷擔勢てよと。敦圉だるハ言発せバ。滝川心ハ歓ぶ。

倣通ふと思ふといへども。絶まで邪智の深ふ。も亀ハ顕さず。姑く思慮の態あるべしぶ。辞ハ柴田ぶ肯めて。其憤ハ理あるべ。池田。高山。丹明。中川。金森。右ぶ威

勢ハ恐るべ多くハ渠ハ随ちん。其のまあるぞ遠地ハおいて車を発さバ京ぶを強ぶ。禁庭を驚ふ。たてまつる恐あり。

一応諸将の心ぶ探り。快と計ぶ。ハ信されふと。理と責るまで。悦ぶらも憾念を堪へて。ハ随ひ。ふきハ料理ふへといふハそ。滝川その他別詩を告て。諸亭ハ帰り。縛七分まで解ふ。然ハ諸将の心ぶ探んと潜ハ廻書を通じふ。ハ依て織田家の諸将来集しつる門ぶハ。丹羽長秀。池田信輝。中川清秀。高山長房。塩川国茂。蜂屋頼隆。塙秀政。前田利家。不破元次。原元治。金森長親。倍ありぶ。一益端席まで出迎へ。廳上ハ清じて詩宜おり。然して諸将ハ向ふて言さく。新名を招

爭虎の謀略と
結ぶ滝川一益
旅亭ふ諸將
孤會を

靖せし律別條あるまで。一旦日亡君の靈前ふおいて。燒香前後の事ふより。勝家秀吉間して既ふ。大事を繁記さんとも。君退てこを以慮ふ。柴田ハ織田家累代の臣家。殊ふ先君の妹君小谷の方を室とされば。内緣も亦疎からぬ。一條ふ拘らぬ。亦秀吉も其級ハ姓も亦異絶と乙ども。敢て年の軍功員を知らず。亡君渠とよく温ふえして。当時播州の領主とあり。最も織田家の功臣ふして。等閑の將士ふあらず。然と今此兩臣家。不和合ふして内亂發らば。法國の敵徒忽地蜂起し。当家の危急累卵ふ等しき歟。君苟も先君の恩沢を。身ふ被る律分ふ過て。今ハ既老臣の員ふ連りたれば。法ふ大事ふ餘所ふ見んもをて不忠あるを。然バとて秀吉。勝家。送ふ道理を強ふして。和平しつゝを相ふもあらず。是ふ依て各の工夫を籍んと。集會を請ものふをば。門々ゞ所不存。快と承所らんと。威儀を整して稟しるふ。滿座の個々遑互ふ面を覗合せ〳〵の〳〵案ふ發言する事あり。廳上寂然〳〵るゞ。漸くふして左座ふ居る。原彦次郎元治。徒ふ席を進み出る。六月羽柴秀吉。山崎境の一戰ふ。逆徒光秀を撃亡し。織田家の汚名を雪ぎしハ。実太の功あんぬべし。瀧川氏。柴田氏ふ功とも。敵る時ハ。羽柴氏ふ劣るべきを。原来其途遠くして。吊合戦ふ漏る。縛。檢ふ拘憾きことふあん。逆和ふ舍を個くハ。金亡君の恩義ふ浴し。不倶戴天の讐成る。

逆ら明智光秀ぶ。滅びるを惟ろ亦。慌ただしき軍あらん。此をもつて考るふ。勝家いろ〳〵偏執ともて。能く守と恨べくんや。遠ふ以顧畏るべきハ。秀吉山崎の切ふ乗じて。幼君を補佐する態ふ徳面、遠ふ天下を掌握をば。大志自然と見まする。勝家深くこれ歎息。軍を料理ものあるゝん。然をば真の忠臣ハ柴田ふ在て。柴ハ逆ふとて覚えつゝ。各いろふと謂ゆ不屈。不破義三。検ふく原元治の稟を保。理聆えて覚い柴田敵ハ古賢といひ武勇とひ亡君ふも。股肱と頼ませ。ふたゝび。忠義ふ並ぶ軍ハあゝじ。惰てや今ハ北國。七箇の蓄積として。後ふ織田家。柱礎の切ふ。あり。然る不一旦。焼香の席ふ

おいて。柴秀吉ぶ傍若無人の所行ハ。柴田滝川を没せ。遍云。諸國の大名列座ふ。其中ふて。此上るふき恥辱を彼り多るもの。誰ろ怒らざる。案あゝんや。然ばこそ勝家ぶ怒ハ是ふして。秀吉の足吉ハ。亦ハ同じく進て共ふ稟さく。何ハ格別一昨日。焼香の接舎の所行ハ。明智光秀ふ逆ぶりて。最愛〳〵覚い。いろふ勇武を車とし。玉えり。伝旌卿。伝者卿ふ。ましてとるゝ。むろふ不御傍ふ。大膳ありる。柴田滝川を悪にして。幼君補佐の。名とえ。ゆくゝ自身第一番の焼香せ。ハ。番く。諸國へ自己ぶ威勢を。飽まで。清〳〵。織田家の武士。亡る。深計。無不肖ふぶゝ乃ち。恐見とるつゝ。これ。論

ぜバ。柴田と羽柴ガ和平を好まゞ。織田家ハ忠を尽さんゼる。和志ある歟軍ハ。勝家ハ同心せゝゞ。快秀吉を斬戮せべし。這度ハ連ある法將達ガ。不存ハ如何ハいやと聲を烈ハ云発ゝゞバ。一益故意これ成制止し。各の不存最も道理ハ聆ゞまゞ。決さるところハきハもあゝゞば。先日清洲の一條ハ。君いまゞ到ゞ為せざれバ。精しき事ハ知ざれども。彼城中ハ舎せし機舎。勝家盛政久をぐも。秀吉ハ對してあゝまゝ。無礼ゞ云等屢くあゝしと聆迫べゝ。其ハ右も左も同下ハ。君見し緯ハ羽柴ガ不領。江北ありゝ長濱と。酒宴の席ハて汗と逼棄取しハ云語ハ絶せゝ。縱令勝家織田家ハおいて。如何ある切労ある呂家ハもせよ。秀吉も

亦莫大の切労ありて。故厳の既場ある領地を。勝家自己ガ武威ハ強乗。非道ハこれ成奪ゝんハ。縱令秀吉あらずとも。彼ハ是ハ怒らざゝんや。秀吉一昨日大徳寺ハて。汁儀を設ゝて勝家を。心の恣ハ恥しめゝるハ。清測の憾恨を報ひしゝあるべし。君ハ羽柴を微少も憤恨ハしといふと。人ども。勝家ガ内縁ハ繋ガれつゝまバ。君も柴田と同意ハらんと。思ふて君とも恥しめさゝんガ。君ハ只顧主家の為織田家の相續無事ハらんと。其をのゝ意ハ悔ふあると。内縁ありとて私ハ。柴田ハ勁力ある不存あらんや。茲ともつて法將を招き。區く主意を承諾らんぞ存じい。法將ハいづ而思ぞと。好計邪智の澎川一益背面ある

の輪を池田伝輝聆よりも。やおを敷川俺仁ゞ。心の中を探試ん。計言ありと蚤くも察知し。池田も渠を欺んとゝいやゝ〳〵滝川殿の稟る。汗ふあるを然るべゝゞ。我倍ゞ不存原。全表。不破倍と共ふ同様あり。其ハ然ふゞ〳〵両家ゴ田利家席を整され。入道殿の命をるところ。是万全の理ふあゝ和平せんふハ如べゝゞと。擾らゞ遮らハ汗の末ふ。前らん。両雄茲ふ弟ふ晌ハ。織田家ふ最も不吉あり。今戦國の中ふして。先若亡去ゝ〳〵されバ。初若の武威殊ふ新し。恭平の世ふ。切士老臣の不快ハ。國家の損亡ゝ。然ふ法國猶いまゞ。至ゝも平治ふかゞるゝち。股肱の臣の不和あるハ。是一大事の基あり。門〳〵織田家の宮恩ふ関るゆい

天地ふ等し。其大切ある主家の栄枯を等閑の沙汰いあるハゝ。今傍方の是非を論ゝ。不平の根を添て。主家の危急を招くものあり。只唯法將稟合され西家の和平を攪擾んこそ是万全の計策あるらめ。各いゞ所思ゝゝと。最憚ある陪和を。丹羽丈助左衛門長秀ハ。其級ゝ一云の評論も書てありしゞ。前田筑前守利家ふ法將ふ嚮ひ。おのく評論するところ。一理ありとハ稟せども。唯是表上の議論あり。真実もつゝ主家を大持とおゝしめさべ緩く事を執料ひ。両將流滴ふ至るまで。恨を含まゞ憤ゝ。門〳〵潜密ふ異見を加へ。穏敏ふ縛を成さんこそ。内外よろゝるべき。外見て料理ゝ。両將是非ふ一輝。和睦を

結ひもふもべくれど。恐らくは流涕を逆さるべし。然もそれば君侍が擬撥もとも。其怜おきみいらえどや。如ぞ君家と朋友との忠信義禮を厚ふあるべ。内緒ある個くよりの懇切ふ。真実の理を殫し。練るこそ専要ふもと。直義の羽ふ結将一同。実ふ理ぞとこれふ同ぎし。其日の評議も茲ふ畢りて。各旅宿へ帰らもさり。勝家が。不平を絆ふ結将を集め。その心底を探試るふ不破原金森ハ荀劫ある。ぞ。柴田の指揮ふ属ものふもども。丹羽池田。中川侍ハ。いづもを何とも。決しぐさし。亦利家も迫来ハ。柴田の旗下ふ属もふもども。京羽柴と懇懇あれべ。心中の程量ぐさし。備其外の門くハ頼め。秀吉ふ帰彼の

兵あり。斯てハ勿く事急ふ。策得ず難ふもし。一遭柴田が氣を慰めて。其上暮び料理べしと。當夕勝家が結宿ふ到るふ柴田ハ秀吉を恨むこと。燃眉の念あり。れば。今青ふ忘ふ歌謡ふ。ふんと。其准備してありりふと。一盃強く教練ふ。性急あらと止めて。後こまぐ方術を策し。るも忘ふ。くふして結ふ。激川が言ふ随ひ。怒を鎮めて勝家ハ帰國の准備と整ひ。

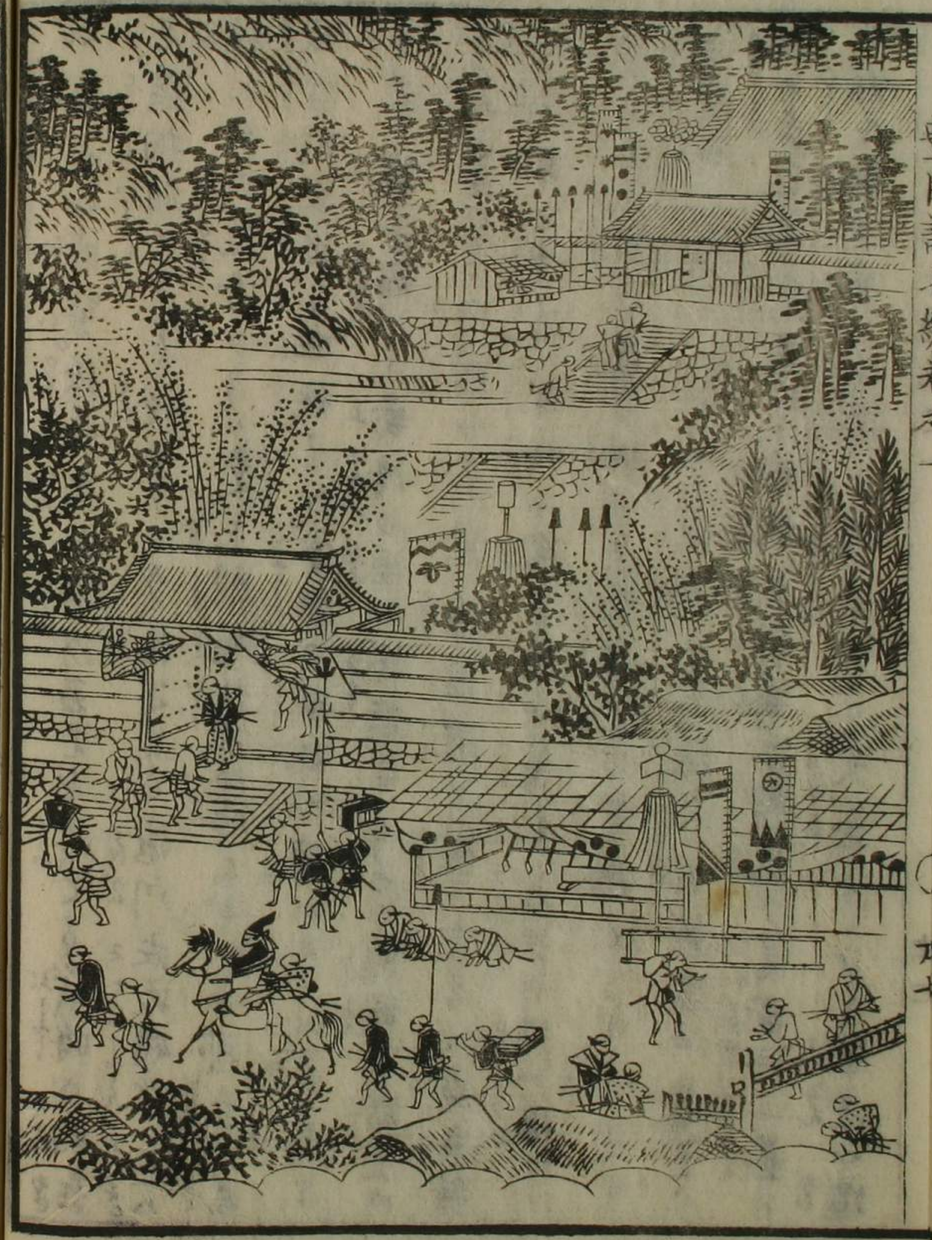
一盃策使秀吉勝家和睦

山ふ接物ハ山を好とし。海ふ栖物ハ海を好とし。是其性の熟まれべあり。原金森。不破侍が怙情の。柴田をもつく是ふうとまるも。逆の逆ふる所謂ふり。然ども柴田匠佐勝家

ハ。徳川ガ強ヰ不遜ヒ。帰國の緯を幕下ヲ告。既ヲ准備も辨ひ。ひろをバ。菊田。金茂。不破倚と偕ヲ。本國城ヲ帰らをとり。其餘の諸侯。北畠。神戸を叛として。池田。中川。丹羽。高山。筒井倚も金別辞を敷て。各ガ區て帰國しるが。羽柴サ將秀吉ハ。洛中洛外の政事を。法般の事を執行ひ。細若ともて安土へ移ーたてまつり。長谷川丹後守。菊田玄以法印ヲ外護ヲさしめ。其身ハ山崎寶寺ヲ居城を擁へ。京都ハ更ヲ江橋。播周の政事を司掌し。軌則嚴密ありれば。威光海内ヲ輝きて。法國の大名。與那の法士羽柴の幕下ヲ属せんと。金山崎ヲ叅向せーるべ。宝寺の門前ヲさかゞ朝暮市をふー。近所辺の工商まで。其調ヲ沢さる。遠晌既ヲ秀吉の威勢。侯長公ヲ劣ヲ武將の兆候を。其相雄ーーー視ーるる。義ヲ徳川左迫將監一益ハ稼ての大望ありるる史。上別厩橋へハ帰らをして。己前の居城勢別楽名ヲ在任して。京都の曉暗を窺ひるるが。秀吉ま

さ〳〵威を輝ー。其將の風の発萌也と。その風聞の聆え々る由へ。ーー肝膽を苦めて屢思慮を繞ーけるが。長谷川殿爵宮を呼倚。謀略を精ーーー。是十月の盡る頃の事。北陸道の常撫として。雪ゑや五尺積りるが。それ故も厩さで移殿富吏。遠城急ぎて北の兵ヲ朱ヲ赤ー。中村文右衛ヲ對面して。徳川一益ガ口狀を舒て稟さく。領く儀合セー大義。ーーー思案を遣

羽柴殿
京都の
成政を總て
借ふ山崎宝寺城
居城とせ



ら一案べ。亜越の地へ勢列境と相違ひ。中冬より三月末
まで雪深くして。人馬の往来自由あらざる。これ不因て雪消
まで。軍事を思止めらる。偏ふ秀吉と和平あるべ。是
結冠者ふ国動せさせて。神戸の城勢ふも箭節と合され。
三方一所ふ発起て。不意ふ攻ものあらべ。唯一挙ふ
して事個れん。這理を快と覚察あると。稟舘らるべ。
文若高弾ふ通知し。這旗と主人ふ達せ。勝家も老体の
大将ふまべ。亟くも其理を了察して。使者の移度と迫く
招き。労ふ酬ふて去せ〳〵慰め。和睦ふ知の返答あり。移
度ふ多く貶紙して。懇切ふこれ答応せ。輜扶ともつて帰
国ふさしめ。然べ和平と辨あんと。府中。末盛。尾山。大野へ

使者と達。前田。金森。不破。原。田将を招寄勝家亟対面し
て。這遷口将を招きし縛。別て田君の辛労ふ関らぎんがあら
べ〳〵頼て各ふも知る如く。秀吉の心底意入ぎ亡君薬
礼の恙ふおいても。奇怪ふること至極せ〳〵。既ふ発兵ふ
さんぎ思へど。禁〳〵幼君を補佐しまい〳〵せ京都を守護し
たるもの城。今礼の憾恨ふよりて。軍馬を発し刀槍せんこと。幼
君へ對して不忠ふあり。此をもつて私を妄和睦ふさんと存ぎ
るあり。然ども秀吉容易諾ふまじ〳〵。各労を盡さ
る和議と攪擬ふ〳〵べ。此上も無き大慶あり。雪中別て疲
労ふ〳〵。偏ふ恃ミまのらまあると。思投てあり〳〵れば。前田
と緘不破。金森或ハ怪ミ或ハ飲び。是まぞの偏執ふ相違。和

睦の縁を懐起しハ。織田家の大幸なんぬべしとて。四将速
ハ頷き合し。各覊旅の備を辨へ。勝家よりも送遣和議
の證として。越前綿千把。鮎の糟漬二箱。これ代進ぜられ
るゆゑ。四将ハ況ハ倆度して。十月廿八日北庄を発足せら
る。馬の足さへ起ざりもこバ。雪國の調器なる。橇てふものハ
枝々なる。三日路を経て。柴田勝家ハ在住ハせし。江州長
濱ハ到着ハし。伊賀守ハ対面して。和睦の儀を品譚ハ
機会勝家病氣ハして。日来ハ愈重り々るゆゑ。四将の
入来ハ心中続えて。麓迄車ハ扶々るを。病床ハ対
面して。前田ハ破倘ゆ懇情を謝し。病中ハ歎べ乃夫も
足下と倶ハ上京せべきと。心外ハ存ぜ為べきやうハし。宜ハ
恃そゆゑらせると。懇勲ハ附言しゆゑバ。四将も切ハ慰安
へ直地ハ長濱を辞退して。舟路より船路を大津ハ上陸
伏見へ出て十一月二日。山崎街なる寶寺へ投着し。富田
左近将監をもて。四人来玉の由代へ。驚産と共ハ対面の
縁を言投々るハ。秀吉これ代思慮せ〻を。半ハ覚察まり〻
て。何氣なく逢せ玉へバ。四将何を存ふして。俺們上京ハ
まゝる義。別の縁ハ以ゝたゞ去ぬる六月。右大臣殿御辞
世の后ハ。老臣の中ハ不快の色見え。近来外慨千万なり。勝
家とても晩年といひ。老臣不和合なる時ハ。主家幼君の御
為なゝゞ。因て遣遣俺們をもて。從来不快の条ある代解
過。已後ハ逆ハ蒲心なく。熟懇ゝざしおゝゝゆゝ。遠彈順

前田不破金
森脩雪中を
冒て城州寶寺へ
柴田が和睦の使
節を向ふ

熟まる胸ハ。柴田ハ格別吾倍ゞ大慶。近上もふき緯ぞふと
慇懃ゝ祝賀して餞らまゝ。秀吉大ふ表情の態ふく。
是ぞ織田家長久の基。何事ゝこれふ如んや。剃や柴田ハ
主家の元臘吾いづくんぞ勝家の言ふ背くべき。和平の狀
ハ乃部より。親ちんと存ずる所。ふる。却て渠より言来て
屠蘇の交せゝるゝ緯ハ。強ふ秀吉ゞ大事ありと。乱心云
の解ゝる如く。深切の返辞せゝまゝれば。茶田。金変。おゝひ
ふ悦び。四人汎と一ふして。新ハ切茶ゝ速地の御諸諸。近上
もふき造化ゝり。備失礼ふハあんふまゝど。久末御笑心ふき
證ふ。誓書一通祝されふべ。祖候いさせゝ吾倍ゞ面目。この
義ハいづふれゆと。聆ゝゆきれゝく羽柴殿。御念の殷ハ理至

あるゞ。此ふ至りて吾一存ふも料理ゞさゝ。弦將の批判も憚り
あまバ。丹羽池田ふも言合せ。誓書ハ弦將の連狀あて。退て進ゞ
もうまべゝと。令せふ四將も再言あく。羽を審ふて別辞と吾
近地を辞て近江ふ到り。長濱ゝりゝる勝家ふ。熟和のゆと
吾知らせ。路急ゞて北の庄ふ辞帰り。秀吉の返答通一ふ。稟
ゝせゝりゝまべ。勝家涯りゝく歓び。四將の労を慰めつ。屠
蘇ゝて帰城ふさゝめ。謀計成就ゝゝゝ車を。濃川方へも通
達ゝゝれバ。一益崔躍歓喜ゝて。吾大望の成就ゝんこと近き
ふありと。内外ふ心を着て工夫と凝らゝ。日夜ふ行儀と繕
らゝりゝ。備赤羽柴秀吉ハ遠き慮あるとゝて。盛くも柴田ゞ
和禪と結受ゝ。四人の使者と帰されゝまバ。羽柴の老臣滝

野弥兵衛。蜂須賀。黒田。播磨の個と最悟て秀吉の前ふ出
迄遣勝家。柴田倚の四人をもつて。和議を稟授する条。何と
も以て併しうしふ。君又これを辞さ玉へで。桃と御許諾
おたせしい。御所存いかゞふいぞや。柴田が嫉妬偏執い罷べ
きもこれあるまじき成。頓ふ所和譚まゝせしい。御賢慮
いかゞふおたせ玉へと。恭くしゞふ問まつるれば。秀吉莞
爾と笑ひ玉ひ。各倚が不審もつともあり。君何ぞ勝家ご
とくの計略ふ陥るべきや。渠が設ろし計議ふ着て。君又渠
を謀ろふ術あり。勝家迄般使者をもつて。君ふ和睦をもと
めー所存ハ。社國の地ハ雪深くして。十月より三四月まで。人
馬の往来通じ倚ぢ。此ともつて弔を歎うんと一旦和睦の

約をなし。剛勇の機會を窺徹して。勢州の滝川滝州の神
戸と二雄ふ成り。発兵おさんぜ謀計ハ境ふ照て観るが如し
君まゝこれ成察せしも忍ぶ。故ふ即地ふ和平を結ひ。前田
の四使を帰せしくべ。勝家君を歎ひうと。心を寧じ剛
断せんこと必定あり。是原柴田が德ふあらぜ。ハ滝川
一益が教ゆるところあんぬべし。其虚ふ乗て此方ふ来春
ふ兵を催し。柴田が出軍あゝざる際ふ。勢州滝州と攻
論さんふ。先滝川を斃ふ滅し。次ふ英濃路を平治ふさ
べ。勝家其期時を遅とも。進退自由あゝざると。如何ともな
る繆然ふまじ。然して后ふ勝家を。謀戮ふまこと疑と翻
まゝより最易しと。兵軌の奥義を教諭されりまべ。滅習恵

田を級として。近士の門〻感服ふし。恐至てぞ退出しける

柴田利家共に長久謀を得長須

遠き慮なき晌ハ。かゝるまで近き憂あり。其哲言を今最ふ。

就柴府中の城主。柴田亦左衛門利家ハ。柴田の和孫を調

帰り。一歌ふ水ゆゝ心所ふ。羅ゑる車のありゞふ京えて。

雙子を又き庭しる城。京都の長吉長九郎左衛門連龍

ハ長谷部長兵衛耐信連ゆり此佐連ハ京会式ふ仕ゆゝ七家の後ふ因幡と故ふ是

加賀ふ下りて水浮義仲ふ後ひ出ゆして其孫能光の地ふ連後ふセーが叫慶彩ふ

柴田ふ屬ゑ佐連ろ笑い

対ゑる寄家連と号き

とゆふ者あり。勲功莫太のゝあゝむ。忠信

無二の勇士ふきバ。利家平生ふ服心として。内外の用を憚

ゞらきゝり。機会ゝゝ亞聽ふ祖候しるゞ。主人の新亀琴

考ふゝぬと案窺ひ。若入ゞゝく懐ひるゆ忍。利家の前ふ

進ゝ出。近士を避て稟るゆゝ。厳ふハゝゆる御沈吟ふる

や。御お貌若ゞ勝き西ゝ。下臣不キふハ。ども。所命の迫

ぢん長へ御諸力ゝゆ成べし。先日上京キー〻ゆ節改言

殘セーゝ哉もい。今日不快の御顔色ふつき。下臣ふも稍密云

のハ。嘶くバ号云の量と。承聆さふ存じ。ゝべふと。思授て演ゆ

きハ。亦左衛門ふ連龍ゞ忠臣云二の心伐識ゞ七〻きゆ思へ。

膝下近く招寄られ。言静ふ言発ゆゝ。這遺柴田の特怙

ふ因服柴秀吉ゞ絆ふ到り。和孫と攪撹ゆるところふ。秀吉い

日来法般の車ふ慎深き氣質ふ慮合ゝ。一哉ふも迫ゝゞ

諾ふゝり。吾今熟〻秀吉勝家両将の。不行どゝ考ゆるふ。亡

君在世の効ゝり。不平の車ども微ゝ走。塔てや先日大徳寺

ふして。燒香の始末あんど彼是と合せ溫る晌ハ。遠互ふ推
威と爭ふべきふ。勝家平日の我慢嫉妬ふひさ智て。和議を
望をし心中ハ。あふさ思材あるべきあり。然るふ羽柴ぐ
胸中も。君犬子代の昔より。熟交ふして頑めこれ試知りつる
ところあり。縱令勝家和議をいふとも。思慮を累ねく返
答をあるを。遠遭ふうぎりて即答せしこそ妄得ね然ども
都鄕言語まで。當て愛ゑる事もふし。もつとも誓書の一
義ふ至りて。丹羽池田倅と禪合せ繕らをとの返答あり。
英智勝をし羽柴秀吉。よも勝家ぐ胸中を知ざる縛の
あるべくんや。左右の勸辭何ともつく妄得ぐさし。我今
勝家の幕下ふ屬し。府中の城主をるもの試。倘西雄の

絆捐ふ近ぢ。年來睦をし秀吉へうを引んも本意あるべ
あつて柴田が幕下をれば。渠が催促ふ隨ハざらんも。不實のこ
ゝ臆病の汚名を受ゆん抔憾さよ其ハ然ゆゝ此戰國ふ
秀吉い器量莫大ゆること勝家勿く渠ぐ麾下へも近ぶ
べゆゝ。此を思ふて君辛痛甚至しと稟されゆる試連弦
源智の武士ふまバ。何の思慮ふも近ぬ相きて下ゆ伊よ
り言狀せんと。存ぜし密意も遠義ふい柴田ぐ遠遭和平
の車へ。全く一個の策慮ふあゝむ荷擔人あつく秀吉を
滅さんとの計略あり。其根生ゝ察ゆるふ。亞國ハ今雪
源くして人馬の進退自由を得む因て和睦を敷辨へ統帥
守ふ剛斷させ。來春暖氣の時ふ秉して。出軍ふさん巧也

這弥計の根生ハ。定て滝川一益なんぬべし。柴田と縁者の誼
川ハ。原来秀吉と不和なれバ。浩る政企せしものなんん。然ども
羽柴秀吉ハ。神武天生の英雄賊べ。など是きの策計成
識でゐなんるのあるべき。此人遠ハい天下を統ひ海を治ま
へき名将なんん不。這遺和睦を結せしハ柴田ゲ罠ハ陷る相
して。却て故の剛断を流察。北國の雪の涼きうちハ。会を起し
てまづ勢ゐを敵ものなんん。雪消人馬の通づる頃ハ滝川定
めて滅亡ぬべし。其朝ハ遠びて柴田勝家。如何とするとも
陰あるまじ。柴田滝川両家とも。運命盡る朝ハたゞ迫し。然
ども家ハ今も牧。柴田の旗下なりきバ。秀吉会と発ま
る時ハ。病気と稱して時を察合せ。休ことと得ぞ出馬わ

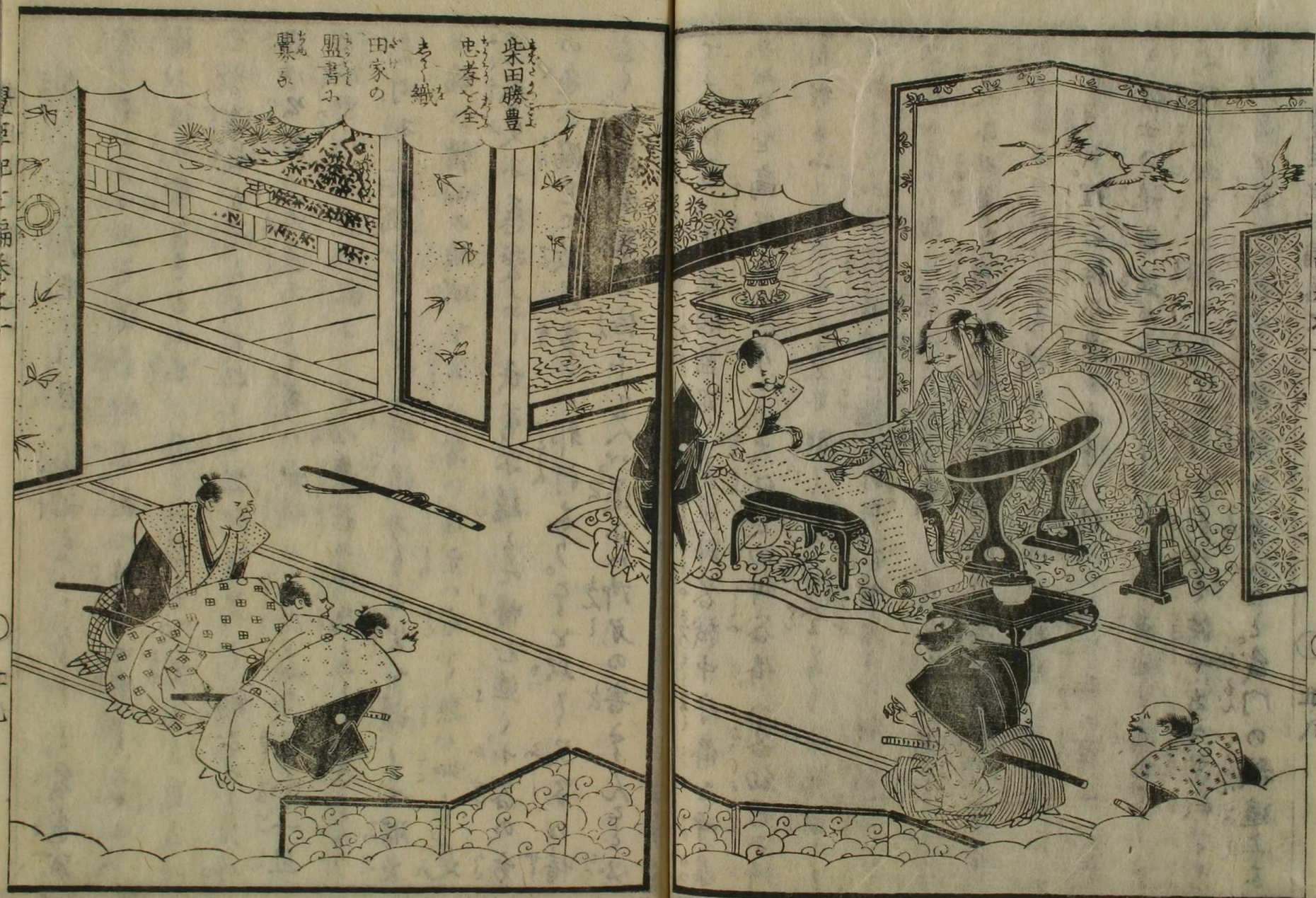
らバ後陣と歩て料理せるハ。原来主家と秀吉とハ。都熟懇
ハとおもしませバよも疎略ハ。憑るまじ。勝家勇猛なり
とハども。智恵浅くして仁義も無し。往く時擬とまるて
見らぜ。義と沛深慮まし。まべしと。憚る色なく策めけ
るのハ。利家ハも強ハもとせるを。連龍ろ策の如く甚准備と
ぞ等ハ。ゐしる。備又羽柴秀吉ハ計議を察まるうハ。姑ら
時日の牧猶なくまづ北國の道次なきバ。江ゐ長濱と投返
さんと。大谷慶松を召せるを。知らる如く長濱の柴田伊賀
守勝家ハ。素勝家の猶子とハども。佐久間玄蕃と不和なる
ともて。是とも其中宜しくらぜ。塔て陪臣木下半左衛門徳永右
兵衛。大隈足田の與力士まで。吾領てより計略をもて潜ハ

帰服ふさしめゝり。汝彼城ふ赴きて。那般〻ふ料理ぶし
と。命せふ慶松委細拝膜。直地ふ長濱へ赴き〻り給るふ
長濱の城中ふハ。勝豊長病あり乃もこハ。宰家徳永石見
守。木下宇左衛つ。諸般を料理これある所へ。秀吉方より寒
中の慰労と称して。大谷慶松来らるゝ也へ。木下宇左衛
つこれ迎へ。直地ふ本丸へ請じ投て。時候の尋問次ふ
示。秀吉より慰労拙として。淀鯉雙尾を進ぜべき。口状懇懃ふ
演るふそ。木下蚤郎返報と。主人伊賀守へ投ぜ〻し〻
ハ。勝豊大ふ歓悦せゝ玉。病中対面許さるべき旨。木下宇左
もて言託るふそ。大谷帥を整めて乃文返遣来りし。綽
時候の慰労のゝ。あゝぞ。伊賀守敬を敬として。各方へも

秀吉より。内意を稟就されゝり。其後ハ此般書文勝家和
平成言投る。何ぞ中心より出るあゝぞ。今ふ敵ぬ多
ふハ為ど。修理進敵嫉妬偏執の心深く。私事ふ忠義と
忘ル。秀吉正路ふ幼君を。補佐したてまつる事を嫉こ。内
緩ある滝川と心を合せ。伝孝卿の助力して。其罪を遁さ
ル。急ふ和平をせゝ玉しハ。秀吉これ成察まるところ。返
弟亜地ハ雲深ゝ玉び。人馬の自由あゝざるをもて。和睦を調
辞閑断を為させ来年雪の尽るを待て。三方一時ふ撃
て出。幼君ふゝびふ秀吉と。攻亡さんぞ謀略ハ。洗ふ照て
見るゞ如し。これ成明察せゝ玉しゝ。早卿越前へ使者を
遣ら玉。和睦言絶をたや既ふ。勝家敵へ言送り如然ども

者至勝豊殿ホハ。秀吉日来怨ミ恨ミ深ク
ホしゝがさし。然バとて示名くい。柴田殿の門族ホまバ。今ヨ
り他軍ヨ自軍ヨと。絶交ホさんも最忸怩。こゝともつて筵
第寺。信義を盡して各へ。悔しまゝゝもところあり。いま
より革めて幼君へ忠を尽され。柴田の家名を末世まで。永
く殘さん所存ホあゝバ。雙方對陣ホさゞる已前ホ。快く織
田家ホ達忠しまへ。秀吉素より所熟懇あり。いろでろ恨
ミを存ずべき。その懇切の妻ゞさりまバ。内ミと言述る
ありと。一旦のうちホ万全の。理と謂してぞ語らまる。
木下徳永ホ人ハ。頑て秀吉の仁義ホ服し。勝家を恨む
こと深ク。大答ゞ狀を大ホ歓び。使者を厚く答応

て。大蓮院八。山路將監。足田左近。神谷城中守倍を呼集
め。此義を高議ホ。大蓮院足田神谷倍ハ。各幼君ホ所
自方ふ。秀吉の志ホ随んこそ。一力全ありと帰服し
ゐれども。山路將監唯一個。これ拒妨ゐゞ。無殘熟ゐる
ホ勝ゞさく。牡て其儀ホ随ふゐ。是ホ因て徳永木下
主人ホ此義を進んと。保賀守勝豊ゞ第ホ出。遠遣秀吉の
内志ホより。法士の志殘を殘らむ語り。幼君へ所自方ゐる
べき有様。理吉細ホ進めゐまバ。勝豊聆て病の褶ホ起怒
り。法士の孫吉然ることゝゝ。つゐゞ秀吉と熟懇ふもせ
よ。現在扶育の親ホ對し。弓を引べき法やある。末代ホ孝
の悪名を殘し。法人の誹謗を受んこと。武門の機遠上ホ


柴田勝豊
忠孝と全
き織
田家の
盟書ふ
禦る

し。各くハ右まれ左まれ。君ハ承諾あゝぐゝと。家色殊
変て見えるゝぞ。徳永神谷。推て強ゐて稟ゝるゆゑ。
強ゐ理の命ゐをども。忠と孝とハゐをを重しと為ふ
ぞ。孝道最も怪らゝざれども。公私をもつゝ論ずるとハ。
忠ハ公義の大道ゐして。孝ハ私情の小路ゐり。公今一旦
と不思ハ。孝道の私ゐして。必竟君の御為ゐぞ。甚だゝり
くハ内ゐも亦。主蕃と云ふる邪族ありて。公を讒して勝家
ゐ編ひ柴田の権威を軍ハ奪ひ。当主ハ有ゝ無ゞ如し。是
原蓉父ゐ慈愛ゐ。武勇ゐ驕りて慢心強く。ゐ各の方
の色ゐ溺をて。政道多くハ邪行あり。こを以ゝ父子の情
ゐく。万事主蕃を信じゐへば。逆ゐハ御身の害ゝんこと必
然ゝり。それゐ轉変秀吉ハ。忠信をもて幼君を補佐しまいゝ
せ。仁義をもつゝ法士を撫育ま。師父も及ばぬ哀愍慈ゐ為
ゐる公今幼君ゐ。弓を引き秀吉を敬としゐゝ。先君へ不忠
ゐして。先祖へ不孝の至ゐり。古来よりして父子。故自方と
別ゝ綜。其例多く繁しゝ。一旦御不孝の御名ハ達つゝも。
柴田の家名を相続ゐし。織田家へ忠誠あゝんこハ却て父の
不忠を洗ひ。家名全き道理ゐひ。秀吉の車ハ右も左も。幼主への
忠義を不思され。織田家へ自方し。ゐこそ。真の忠孝ゐ
べゝれと。利を竭しゝる強言ゐ。強義の勝者ゐ家ゐもと思ふ。
心を決して法士ゐ向され。各ゝ紀ゐ科理をよと。漸く承引ゐ
しゝゝゝをバ。徳永木下大隼侍大ゐ歓び。取ものも取あへ

ぞ。蔭び大谷ゝ對面して。主張勿君へ。勢力の条を稟聆られば。慶松も固く約諾して。早蚤山端宝寺へ辞返り。仔細ゝ言狀あゝるゝゝぞ。秀吉喜悦斜なゝぞ。華ゝ使者と遣れし。伊賀守へ来國光の太刀一口。黄金三百枚これ送らる。雪冨與力の人々へも。黄金太刀等それ〳〵ゝ。暗なく分給せゝるゝるゝ。長濱城中弥生〳〵。秀吉の仁愛ゝ感服し。蔭び長濱一城ゝ秀吉の掌ゝ属しゝりゝ

繪本豐臣勲功記七編卷之壹了